


日韓文化交流基金 NEWS

2012.9.28 NO. 63

The Japan-Korea Cultural Foundation

Contents

- | | | | |
|-----|--|----|--|
| 1 | 第3期日韓文化交流会議
提言を採択、政府に提出 | 9 | 交流エッセイ
日韓スポーツ交流とその展望
～二つのロンドン五輪の時空を超えて
大島裕史 |
| 2-5 | フェロースhip事業
23年間に625名のフェローが訪日／訪韓 | 10 | 助成事業紹介
日韓伝統文化総合紹介交流イベント in 釜山
横尾靖 |
| 6-7 | 日韓文化交流基金講演会
「韓流小説を読む」川村湊 | 11 | 日韓文化交流基金事業報告
(2012年4月～6月) |
| |  | 12 | 公募プログラム
フェロースhip・助成のご案内 |
| 8 | アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流
(キズナ強化プロジェクト) 始動 | | |

第3期日韓文化交流会議

提言「創造的日韓・韓日関係を目指して」を 採択、政府に提出

日韓文化交流会議は、5月16、17日の両日、ソウルで「第4回全体会議」を開催し、これまでの議論を整理した提言「創造的日韓・韓日関係を目指して—第3期日韓・韓日文化交流会議の提言—」を採択、発表しました。

日韓文化交流会議は、1998年の日韓首脳会談で発表された「日韓共同宣言—21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」の精神を踏まえ、日韓両国間の国民・文化交流を幅広く推進させることを目的として発足した日韓の文化・芸術・スポーツ・学术界の識者からなる協議体です。第1期(1999年～2002年)、第2期(2004年～2008年)を経て、第3期会議が2010年に立ち上がり、(1)日韓間の文化・学術交流の現状を評価し、(2)「参加する」文化交流の重要性を確認した上で、(3)そのような文化交流、国民レベルの交流を一層強化するための方策、そのために政府、地方公共団体及び民間団体が果たし得る役割等について議論を進めてきました。

今回の会議後に発表した提言は、これまでの4回にわたる全体会議と2度のシンポジウムでの両国委員の議論を土台としてとりまとめられたものです。

同提言においては、過去10年間に劇的に拡大し、大衆文化を中心に、活発に展開されている文化交流、特に両国間でのハイブリッド的な文化現象について評価しつつも、非商業的分野、伝統文化等において未だ不足する部分があることを指摘しています。そしてその克服のためには政府や公共部門の果たすべき役割が少なくないこと、成熟しつつある両国の文化交流は、相互理解、相互の尊重の段階から、協働して新しい文化を創造



日本側委員による玄葉光一郎外務大臣表敬訪問

していく段階に進むべきであること等をうたえています。また、新しい文化パラダイムの担い手としての青年、市民組織、学術組織等の役割の重要性についても言及しているほか、それぞれの課題について具体的な方策を提案しています。

日本側では、会議終了後の6月28日(木)に、川口委員長ならびに委員一行が玄葉光一郎外務大臣を表敬訪問し、提言を提出すると共に、その間の議論の経緯等について報告しました。玄葉大臣は、「有意義な提言をして頂いたことを大変嬉しく思う、日韓関係は大きな変化をしているところであり、政府としても未来志向的な日韓関係を構築できるような努力していきたい」と述べました(第3期日韓文化交流会議のメンバー一覧はP11に掲載しています)。

日韓文化交流基金は、日本と韓国の優れた研究者に相手国での調査・研究活動を行う機会を提供するとともに、特に次代を担う中堅・若手の研究者の滞在研究を支援する「フェローシップ事業」を実施しています。本号ではフェローシップ事業の概要や、フェローシップを受けた「基金フェロー」OBの方々からの声、そして実績などをご紹介します。

概要

フェローシップ事業は、日本と韓国の学術交流・知的対話の促進を目的として、まず1989年に韓国の学者・研究者を日本に招く「招聘フェローシップ」を開始しました。その後、1992年からは、日本の学者・研究者の韓国への「派遣フェローシップ」も実施しています。これらの制度を利用して日本で研究を行った韓国の研究者は2011年度までに562名、韓国に派遣した日本の研究者は63名に上っています。

フェローシップの対象となるのは、日韓関係を中心とする人文・社会科学分野の研究で、招聘・派遣ともに、申請には大学院博士課程修了の必要単位を取得していることが条件となっています。

毎年10月に、招聘は韓国内の日本政府公館（在韓国大使館、在釜山総領事館、在済州総領事館）、派遣は日韓文化交流基金にて申請を受け付け、外部の専門家等による審査を経て採用者を決定しています。採用された研究者は、それぞれ受け入れ先の研究機関で、研究協力者の支援を得つつ、調査・研究を進めます。

研究者について

フェローシップを利用して滞在研究を行うのは、大学等の研究機関に所属する研究者が中心ですが、他にも博物館・美術館の学芸員やマスコミ関係者、政府機関の職員等、多彩な背景を持つ申請者が採用され、それぞれの専門的な視点から研究を進めています。

研究ジャンル別では、従来から日韓間で重なる領域の多い歴史学、政治学等の分野の研究者が比較的多かったのですが、最近の傾向として、歴史学の中でも映画史、放送史、建築史、文化財といった分野を専攻する研究者が増えています。語学、文学、社会学、法学、経済といった分野を専攻する研究者も多数採用されています。

フェローシップの対象として、若手・中堅の研究者に重点を置いているため、基金フェローとしての滞日・滞韓時には博士論文を準備中の研究者もおり、滞在中の研究が博士論文の完成につながるケースも少なくありません。

近年の特徴として、招聘事業においては、アメリカ等、海外の大学・研究機関に所属しながらフェローシップに応募、日本での調査・研究を行う韓国人研究者も増えています。

研究成果

招聘・派遣ともに基金フェローには、フェローシップ期間の終了後に、研究成果を論文として提出することが義務付けら

れていますが、多くのフェローが長期にわたる調査・研究、フィールドワーク、関連する研究者との交流、意見の交換を通じて、実証的で水準の高い論文を作成しています。フェローから提出された論文は、日韓文化交流基金において「訪日学術研究者論文集」「訪韓学術研究者論文集」として毎年刊行しており、これまでに訪日研究者論文集は18巻、訪韓研究者論文集は12巻を数えています。



訪日・訪韓学術研究者論文集

フェローシップの期間を終えた研究者が、研究成果を日韓またはその他の国の学会で発表したり、あるいは論文が学術誌、専門誌に掲載されることもあり、研究成果の社会への還元も行われています。研究が日本国内のマスコミの注目を集め、大手新聞紙上に研究内容についての記事が掲載された例もあります。



読売新聞(奈良版)2011年1月13日付31面

今後のフェローシップ事業に向けて

日韓文化交流基金では、毎年9月に役員からなる代表団を韓国に派遣し、日韓交流に関わるの方々にお会いしていますが、期間中に毎回、招聘フェローシップ経験者の方々をお招きし、懇談会を開催しています。滞日研究時の体験談や、フェローシップが現在の研究に及ぼした影響等について伺いつつ、今後の事業を展開する上での参考にしています。

フェローシップ事業は、開始以来、今年で24年目を迎えました。その間、日韓関係は大きく変化してきましたが、日韓間の相互理解を促進し、両国の学術・文化発展に資するという大きな目的の下、この事業が今後も両国の優秀な研究者の交流・育成に貢献していくことを期待しています。

これまで当基金の招聘・派遣フェローシップを利用して、日本・韓国で研究された研究者の先生方から、当基金のフェローシップがご自身の研究生活に与えた影響などについて寄稿していただきました。



亜洲大学校法学専門大学院副教授
尹泰永(招聘フェローシップ)

法律はきわめて抽象的・一般的に規定されているため、研究のためには法律用語が内包する意味を解釈する作業が必要である。このような研究方法の中、代表的なのが、他の国の法律・制度と比較して法律解釈上の難点を解決する比較法学である。しかし、比較法学は、単にその国の言葉がわかれば済むというものではない。法律は、その国の社会文化を制度化して圧縮したものであるため、その社会への理解無くしては、比較法学も単純な翻訳作業に終わってしまう。そのため、法律の研究者は誰しも、研究対象国での滞在研究を熱望するが、日韓文化交流基金はこのような私の希望を叶えてくれた。家庭の事情で外国留学は夢でしかなく、また研究も浅い自分だったが、可能性を評価してくれたのだと思う。今も感謝している。

日本の法律は、韓国の法律の歴史にとって大きな意味を有するため、日本の文献を参照するために日本語を勉強する法学者も多い。しかし、日本と韓国の社会文化は大きく異なっており、日本の法律は韓国の実情にも合うだろう、と単純に考えるのは危険である。訪日研究を通じて日本社会への理解を深め、日本の法制度の成り立ちを研究しているため、面はゆいだが、しばしば“日本通”という評も頂いている。フェロー当時の研究を基礎として、韓国帰国後に多数の論文を発表し、日本の学術誌にも投稿している。日本国内でも最も審査が厳しいといわれる権威誌「民商法雑誌」にも論文を掲載して頂いた。

また、韓国の大法院(最高裁判所)のプロジェクトである「朝鮮高等法院判例」の翻訳作業にも参加しており、民事法学会傘下の研究グループである「明治民法研究会」のメンバーとしても活動している。「明治民法研究会」は、韓国の民法に立法理由書が存在していない中で、韓国民法の制定に大きな影響を与えた日本の明治民法の立法理由書を分析しているグループである。このような活動がきっかけとなって、日本の学会で韓国民法の改正と関連した報告を行う機会も二度あった。

最近も時折日本を訪問するが、そのたびに、フェローに採用され、胸を膨らませながら初めて東京の日韓文化交流基金事務所を訪問した時のことを思い出す。

ユン テヨン
尹泰永

PROFILE

専門は民法。招聘フェローとして京都大学大学院法学研究科で研究(2004.9~2005.8、当時は(韓国)中央大学校法学科非常勤講師、大法院判例審査委員会調査委員)。当時の研究テーマは「営業権(営業上利益)の民法上の保護」。2005年(韓国)中央大学校大学院法学科博士課程修了(法学博士)、2006年翰林大学校法行政学部専任講師、2007年亜洲大学校法学専門大学院助教授、2010年より現職。



東京大学大学院総合文化研究科准教授
外村大(派遣フェローシップ)

日韓文化交流基金のフェローとして高麗大学受入れでソウルに滞在したのは1999年4月~2000年3月、研究課題は「植民地期の在外朝鮮人社会」であった。滞在中は植民地期の史料のまとまったコレクションのある亜細亜問題研究所、ソウル大図書館、韓国国立中央図書館などで関連史料のコピーをとったり、統計データの輸入をしたりする日々が続いた。在外朝鮮人関係の人口統計資料は複数系統の種類があったり、地域ごとに職業や年齢別の調査を行っていたりと、調べて整理するうえで結構手間がかかる。そのために幅広く史料を閲覧し検討する環境を得たことは大変ありがたかった。そこで得た史料はその後まとめた博士論文等でも使わせてもらっている。さらに近年まとめた拙著『朝鮮人強制連行』の執筆や、いま取り組んでいる戦後の日韓間の人口移動の研究でも、フェローシップ時代に植民地全体の人口移動についてある程度把握していたことからみえたことが多い。

また、私と近いテーマに取り組んでいる韓国人研究者から教えていただくことも多々あった。当時、在外コリアンの問題は歴史学界ではまだマイナーなテーマであったが、その重要性を確信し研究を続ける同世代の韓国人に接することができ、大いに勇気づけられた。その後、“コリアンディアスポラ”は韓国の学界でも注目され、私もしばしばこれに関連したシンポジウムに呼ばれる機会も得るようになった。シンポジウムの企画者はもちろん、私が韓国滞在中にお世話になり、いまは韓国の学界で中核的役割を果たしている友人たちである。さらにはその縁を発展させて日韓の研究者を組織した、在日コリアンの歴史についての共同研究も現在進行させている。

語学の方は一年いた割にはあまり伸びなかったが、とは言え、滞在中に機会を与えられ、冷や汗をかきながらも、韓国語で学会での報告やらコメントを行う程度のずうずうしさは身についた。ただし、韓国での滞在を通じて得たことは“研究に役に立つあれこれ”だけではない。四季の移ろいを感じ、研究者ではない庶民の考えや暮らしに多少なりとも接し、それを通じて韓国とそこに住む人びとにいっそう親しみを感ずるようになったこと、それは私にとって何よりの財産と思っている。情報通信手段の発達で一昔前では信じられない位に日韓の距離は近くなっていても、おそらくそれは韓国で生活しなければ得られないことだろう。

とむら まさる
外村大

PROFILE

日本近現代史専攻。研究テーマは朝鮮民族の人口移動・在日朝鮮人社会の歴史。派遣フェローとして高麗大学民族文化研究院で研究(1999.4~2000.3、当時は早稲田大学文学部非常勤講師)。当時の研究テーマは「植民地期における在外朝鮮人社会」。2002年早稲田大学にて文学博士号取得、2007年より現職。

1989年度にスタートしたフェローシップ事業では、2011年度までにのべ625名の日韓の研究者に対し支援を行ってきました。ここではフェローシップを受けた研究者の所属機関、相手国での受入機関、研究ジャンルなどをご紹介いたします。

■基金フェロー総人数(1989~2011年度)

	招聘	派遣	計
男	440	55	495
女	122	8	130
計	562	63	625

2011年度までの23年間の実績ですが、おおむね年平均で招聘24人、派遣3人のペースで採用してきたこととなります。

■招聘フェローシップ

●所属機関の国別人数

国名	韓国	日本	アメリカ	中国	イギリス	カナダ
人	492	32	25	10	2	1

招聘フェローシップに採用された韓国人フェローは、韓国の研究機関に所属する研究者が多数を占めていますが、韓国以外にも日本、アメリカ、中国、イギリス、カナダ等の機関に所属する研究者がいます。

●所属機関トップ10

	所属機関(地域)	人
1	ソウル大学校(ソウル)	33
2	釜山大学校(釜山)	21
3	高麗大学校(ソウル)	20
4	延世大学校(ソウル)	13
4	釜慶大学校(釜山)	13
6	韓国外国語大学校(ソウル)	12
7	全南大学校(光州)	11
8	西江大学校(ソウル)	10
8	全北大学校(全北)	10
8	東国大学校(ソウル)	10

(トップ10の占める割合)27%

●受入機関トップ10

	受入機関	人
1	東京大学	130
2	慶應義塾大学	47
3	早稲田大学	38
4	京都大学	32
5	筑波大学	24
6	九州大学	14

	受入機関	人
7	一橋大学	12
8	東北大学	10
8	上智大学	10
10	東京藝術大学	8
10	東京学芸大学	8
10	東京外国語大学	8

(トップ10の占める割合)61%

また、招聘フェローの所属機関別人数を見るとソウルからの研究者がもっとも多く、次に釜山と続きます。一方、日本での受入機関を見ると、東京に集中しており、その中でも東京大学が群を抜いて多くなっています。

■派遣フェローシップ

派遣フェロー63名のうち、ほとんどは日本からの研究者ですが、韓国の機関に所属する研究者が、博士学位取得等のためにフェローシップを受けるケースもあります。

所属機関別に見ると、以下の通りです。

●所属機関トップ5

	所属機関	人
1	東京大学	5
2	神戸大学	4
3	九州大学	3
4	名古屋大学	3
5	愛知教育大学	2
5	大阪市立大学	2
5	佐賀大学	2
5	防衛庁	2

(トップ5の占める割合)37%

●受入機関トップ5

	受入機関(地域)	人
1	ソウル大学(ソウル)	14
2	高麗大学(ソウル)	10
3	漢陽大学(ソウル)	4
3	中央大学(ソウル)	4
5	慶北大学校(大邱)	3

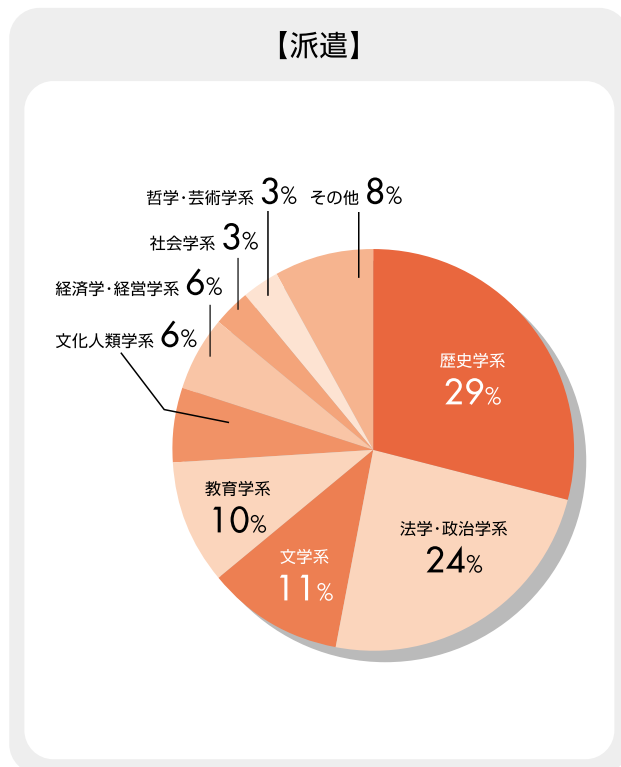
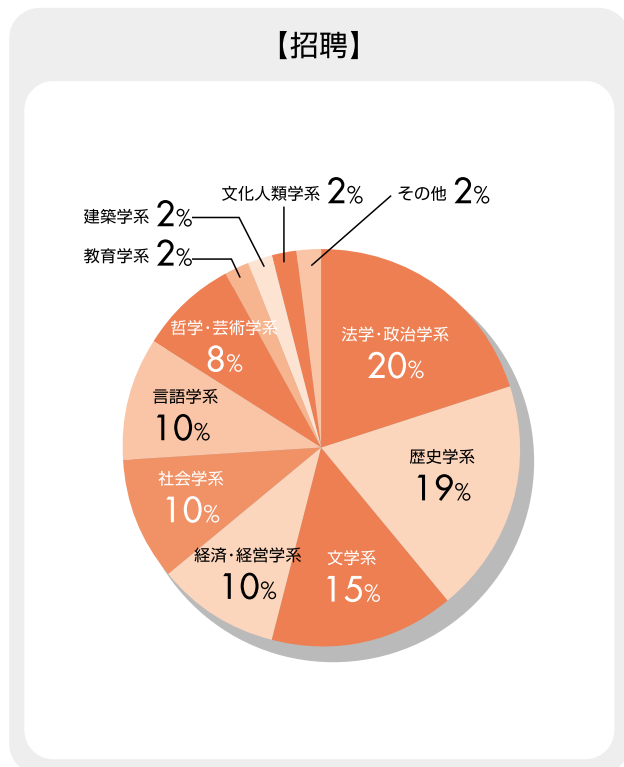
(トップ5の占める割合)56%

また、派遣フェローの受入機関は8割近くがソウルに集中しています。

■ 招聘・派遣フェローの研究ジャンル

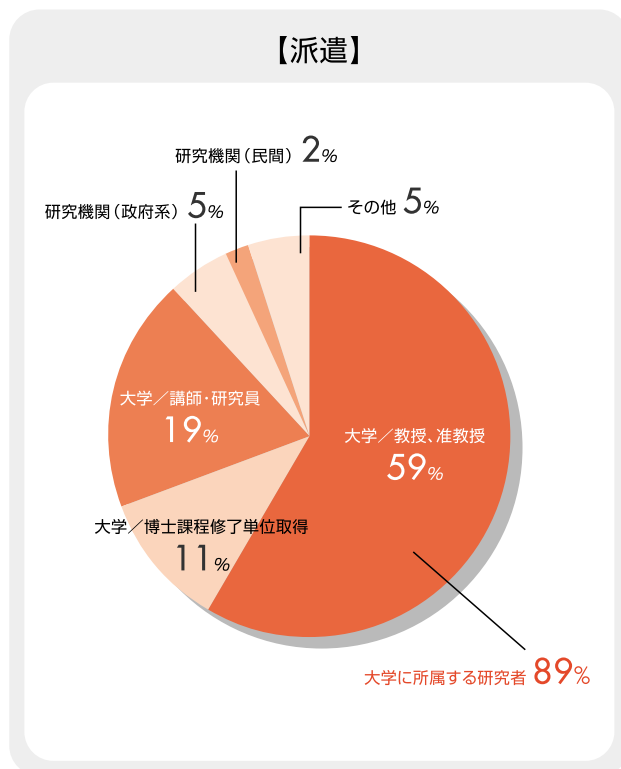
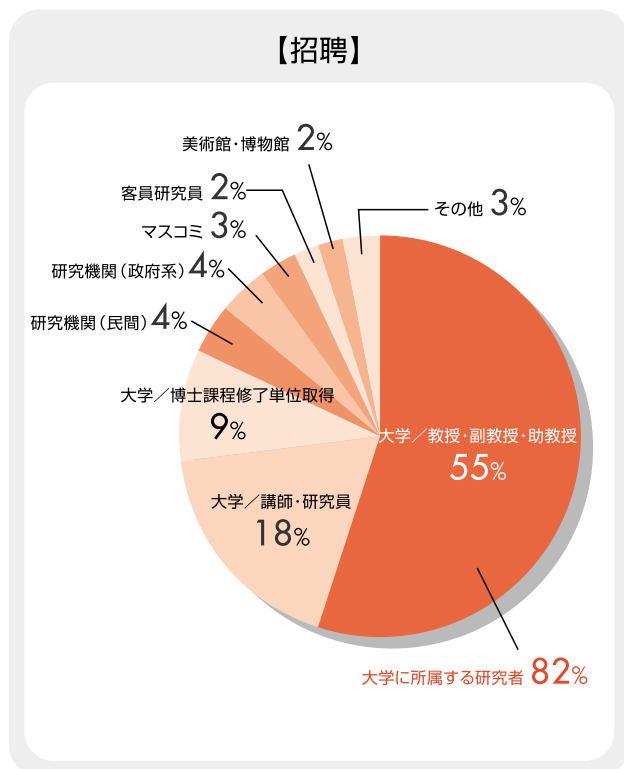
● 研究ジャンル

招聘・派遣ともに法学・政治学系、歴史学系、文学系の研究者が半数を超えています。



■ 招聘・派遣フェローシップ研究者の職位

招聘・派遣フェローとともに、大学機関所属者が8割を超えています。また招聘では研究機関のほかにもマスコミや美術館・博物館からの研究者もおり、研究者の多様性が見られます。



日韓文化交流基金講演会「韓流小説を読む」（抄録）

世界的ベストセラーとなった申京淑の『母を願ひ』に続き、今年5月には孔枝泳の『トガニ』が発刊されるなど、韓国文学が注目を集めています。文学にも韓流が定着するのか、まだあまり知られていない韓国文学の現況を踏まえながら、その魅力を文芸評論家としてもご活躍中の川村湊法政大学国際文化学部教授に伺いました。



現代文学に描かれる家族の関係性

韓流というと、ドラマや映画、K-POPのイメージが強く、まだ小説にまでは及んでいないのが実情です。ですが最近では出版社や翻訳者の方々の努力によって、少しずつ文学の分野にも韓流が広がっています。最近出版されたものシンギョンスク コンジョンのなかでも、申京淑と孔枝泳は韓国だけでなく日本や他の国でも高い評価を受けています。

昨年、国際ペンクラブの獄中作家委員会で、死刑について考えるというテーマの大会を催しました。ゲストに孔枝泳さんと呼ばひ、死刑、死刑廃止について話して頂きました。彼女は『私たちの幸せな時間』（以下、『幸せな時間』と略）という死刑囚と主人公の女性との一種の恋愛小説を書いています。どうしてこういう小説を書こうとしたのかということをお話して頂いたのです。ちょうど日本では中村文則さんが死刑執行人の苦悩を小説にしていたので、この二人をゲストとして呼びました。

孔さんはその後、『楽しい私の家』という作品を発表していますが、これは『幸せな時間』とはまたちがった雰囲気、ちがうトーンで書かれています。これは孔さんの私小説といっいでいでしょう。主人公は大学受験を控えた娘。彼女から見た母や実の父、弟たちの父親。孔さんは三回離婚して、子どもたちはすべて父親がちがいますから、この小説はまさに孔さん自身のことです。三回離婚とはすごいことです。韓国は日本より家長制的な考えが強いから、三回も離婚したという、蔑まれたり変な同情をされたりする。それを逆手に取って、楽しい私の家といっているところに彼女の作家魂を感じます。

次に『トガニ』を読むとまた感じが違う。“学園は欺瞞と倒錯のつぼだった”というキャッチコピーが目を引きま。聴覚障害児の学校で起きた非人道的な事件を告発する意味で書かれたのだと思います。『幸せな時間』が死刑制度に対する社会への怒り、糾弾から書かれているように、『トガニ』も一見民主主義で豊かに見える韓国に、弱者を虐待する部分があるということをお話しています。この三作を続けて読むと、一方では社会派、一方では私小説的という別のジャンルの小説を書いているように見えますが、家族という視点で見

くと、三作品は共通するものがあります。『幸せな時間』の主人公の女性は家族のなかで孤立した存在です。自殺未遂を繰り返す彼女は家族社会からはみ出した存在として描かれます。家族という関係性のなかで虐待されているといっいでいでしょう。そこから社会の秩序のなかの悪をあぶり出す、というのが孔さんの小説の方法論ではないかと思ひます。一方では暖かなヒューマニティのある作品を描き、一方では社会的な糾弾、告発的なものをお描きしているように見えますが、その実、家族や文明化した社会の課題、問題をはらんでいるのだと思ひます。

韓国文学の紹介に尽力した安宇植氏

次に申京淑さんですが、彼女とは1995年の日韓文学シンポジウム以来のお付き合いです。このシンポジウムは、文芸評論家で翻訳家としてもご活躍された安宇植アンウシクさんが、韓国から作家を招へいして日本の作家との交流を企画されたことが発端となっています。その時に参加された中上健次さんが定期的にやっいでいこうと提案され、彼の死後、その意思を継いで始まったのがこのシンポジウムです。95年には島根で開催されました。安宇植さんはその頃から申京淑さんの作品を日本に紹介したいということで、出版社に働きかけたりしておられました。それが突って長編『離れ部屋』が集英社から出まして、今回『母を願ひ』が出たのですが、刊行される前に亡くなられました。申さんに限らず、韓国の現代文学を日本に紹介、出版することへの安さんの努力と功績は非常に大きかったといっいでいでしょう。韓国文学がブームとまではいえなくても、本格的に紹介されるようになったこの時期に、彼を失ったのは大変な痛手だと思ひます。

それ以前のお話をすると、韓国の現代文学が翻訳されるようになったのは、中上健次さんの尽力で新潮社から『韓国現代文学13人集』『韓国現代短編小説』などが出たからです。安さんも翻訳家として参加されました。そこから韓国に現代文学があると日本で認識されるようになったのだと思ひます。それより前は岩波文庫で短編小説集がありますが、韓国文学者の長璋吉チョンギョクさんが訳されたもので、日本でいうと近代文学にあたりま。戦後の文学に関してはあまり紹介されてき

ませんでした。私もお手伝いした『太白山脈』や黄皙暎さんファンソクヨンの小説などの現代小説はありましたが、革命、虐殺、闘争など波乱万丈で長いし暗い。これらも韓国の現代史や思想の流れを知るために、紹介する意味はありますが、『太白山脈』10巻はさすがに心構えをしないと読めません。

読者を共感させる家族の描き方

安さんは申京淑さんの本を滑らかで柔らかな文体で読みやすく翻訳しています。今、韓国文学のブームがあるとしたら、先鞭をつけた人だといっていいいでしょう。彼が最後に残してくれたのが、『母を願ひ』です。ソウル駅で母親が行方不明になる話で、子どもたちが母を探して歩く。これを読んだ時、

韓国の家族崩壊がここまで進んでいるのかと、ここまで書いてもいいのかと心配になったほどです。韓国の家族の儒教的な絆の強さを知っている者としては、母がいなくなったのに普通の生活を続けられるなど、ありえない気がしました。年老いた母がいなくなるという作品を書いたということ自体が、ある意味衝撃的だったと思います。『母を願ひ』申京淑著／安宇植訳（集英社）



孔さんの作品でもそうですが、さまざまなかたちで韓国社会では家族の形、あり方が変わってきているように思います。日本ももちろんそうです。最近になって、日韓の現代小説が呼応し合っているのではと感ずることが多くなってきています。

韓国では日本の小説が人気で、村上春樹は全作品といえるほど翻訳されています。大きな書店に行くと日本の小説が平積みになっていて、コーナーまであります。日本で出版されると同時発売に近いほどすぐに翻訳が出ています。吉本ばなな、江國香織などが人気で、読者層は若い女性が多いと聞いています。彼女たちは、まるで自分のことが書かれているようだ、と口をそろえます。『ノルウェイの森（韓国では『喪失の時代』）』も自分のことのように共感している。韓国の小説にはそういう共感を抱けなかった。村上春樹を支持する若い世代にとって、韓国にはこれまで共感できる小説がなかったということです。

角田光代や吉本ばななにしても書かれている世界は狭いが、そこを丹念に、心の片隅の感情の揺れそのものを文体として書いています。そこが韓国で受け入れられた要因だと思われる。そんな時、孔さんや申さんが現れ、自分たちの生活の手の届く部分を掘り返し、なぞるような作品を書いて、韓国国内で現代小説として受け入れられた。『離れ部屋』はロングセラーになっています。『母を願ひ』はアメリカでも読者を獲得しました。田舎から出てきた母が迷子になるという物語は韓国的な気がしますが、アメリカでも日本でも自分のことのように受け止めて読む読者が存在するんですね。親との関係、家族の在り方、兄弟との関わり方を考えさせるといったらい

いでしょうか。これを読まれた方はこれは東京でもどこでも起こりうる、家族というのほろい形ではかつながっていないことを改めて思い起こさせられたのではないのでしょうか。

韓流小説としてこの二人の作品が読まれているとしたら、韓国でも日本でもアメリカでも、家族という自分たちの基盤になる人間関係を丁寧に掘り返し、改めて考えさせる部分が二人の作家のなかにあるからではないのでしょうか。

韓国文学の新たな息吹

一方、李承雨さんイスンフの『生の裏面』という作品は哲学的で難解な小説です。すらすらとは読めませんが、ぐいぐいと読ませる小説です。父とは自分にとって誰であったか、というような、家族、親子を哲学的、宗教的なテーマとして取り上げています。スタイルは変わっていますが家族、親子と正面から取り組んだ作品であることは間違いありません。同じように家族を描いていても文体は申京淑さんとはまったく違います。その他にも最近ハン・ガンや80年生まれのキム・エランなど新しい作家がどんどん出てきています。ハン・ガンの『菜食主義者』は妻が突然ベジタリアンになるという小説で、その妻を巡る家族の困惑が描かれています。『楽しい私の家』や『母を願ひ』には家族を思う愛情がありましたが、『菜食主義者』には娘に無理やり肉を食べさせようとする父親など、家族の恐ろしさが描かれます。村上春樹の作品に『眠り』というのがある、不眠に陥った妻を巡って夫婦が変化する恐ろしさが描かれています。『菜食主義者』を読むと、これまで韓国にはなかったということで受け入れられてきた村上春樹のような作品が、もう韓国にも出てきた、あるいはそれを超える作品が出てくるという兆しさえ感じさせます。このような作品が出てきますと、韓国文学を読む楽しさがますます高まっていく気がします。今後は日本人が読んでも共感できる作品がどんどん出てくるのではと期待しています。



『菜食主義者』ハン・ガン著／きむ ふな訳（クオン）

かわむら みなと
川村 湊

PROFILE

1951年生まれ。法政大学法学部政治学科卒。専門は、日本近現代文学、文芸評論、日韓比較民俗論。東亜大学校（韓国）助教授、法政大学第一教養部助教授等を経て、1999年より現職。

1980年『異様（ことよう）なるものをめぐって—徒然草論』で群像新人文学賞を受賞。2004年『補陀落—観音信仰への旅』で伊藤整文学賞。2007年『牛頭天王と蘇民将来伝説』第59回読売文学賞「随筆・紀行賞」受賞。著書に、『生まれたらそこがふるさと—在日朝鮮人文学論』（平凡社、1999年）、『思想読本（6）韓国』（作品社、2002年）、『アリアン坂のシネマ通り 韓国映画史を歩く』（集英社、2005年）他多数。

アジア大洋州地域及び北米地域との 青少年交流（キズナ強化プロジェクト）始動

本年度、外務省の「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流（以下、キズナ強化プロジェクト）」の一環として、招へい・派遣事業が実施されます。本プロジェクトの概要とともに、一環として実施された「日本教員訪韓研修団（第1団）」について紹介します。



被災体験を語る日本の教員（三峰初等学校）

アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流概要

「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流（キズナ強化プロジェクト）」とは、アジア大洋州地域及び北米地域の41の国・地域から青少年を我が国へ招へいし、交流プログラムや被災地視察、ボランティア活動等を実施するとともに、被災地の青少年をそれぞれの地域へ派遣することを通じて、日本再生に関する外国の理解増進を目的としており、平成25年3月末までに、招へい、派遣を合わせ、1万人以上の交流が予定されています。

日本教員訪韓研修団（第1団）

キズナ強化プロジェクトの一環として実施された「日本教員訪韓研修団（第1団）」は、東日本大震災の被災体験や現在の復興の状況を韓国国内で発信することを目的として、北海道・岩手県・宮城県・福島県・茨城県に所在する小・中・高・養護学校の14名の教員が参加し、6月26日から7月5日までの日程で実施されました。

韓国での滞在中、訪問先の三峰初等学校、冠陽中学校、弥陽高等学校において、映像資料を用いて、東日本大震災に関するプレゼンテーションを行いました。研修団を代表して2名ずつ、震災当時の学校や生徒の状況、復興に向かって現在の状況について発信を行い、韓国より寄せられた支援に対する感謝のメッセージを伝えました。

各校では、教職員をはじめ、保護者代表や生徒代表が熱心に耳を傾けていました。震災により、教育現場にどのような影響があったのか、生徒たちがどのような様子だったかに関心が集まり、質問も寄せられました。

例えば、弥陽高等学校では、生徒代表からの「震災前と震災後で生徒の何が変わったのか」との質問に対し、団員からは「震災前は夢や目標のない生徒が多かった。震災後は命が助かった自分にこそできることがあるのではないかと思います」

生徒が増えた。例えば避難所で働く看護師の姿を見て看護師を志した生徒がいた」。

また、「何か韓国にいる私たちができることがあれば教えてほしい」との質問に対しては、「同級生たちに今日の発表のことを伝えてほしい。何事もなく学生生活が送れるありがたさを感じて、学生生活を大切にしてほしい」と教員の立場ならではのメッセージを伝えていました。

今回の研修を通して、被災地から参加した団員の生の声を発信したことは、日本復興への理解を深める一助となったのではないかと思います。また、団員からも、「今回のプレゼンテーションを、韓国の先生が授業の一環としてでも扱ってもらえればよいと思う」といった意見が述べられました。



発表に聞き入る韓国の学校関係者（冠陽中学校）

<日本教員訪韓研修団 日程表>

6/26(火)	仁川国際空港着	7/1(日)	終日ホームステイ
27(水)	昌徳宮見学、国立国際教育院、冠陽中学校訪問	2(月)	三峰初等学校訪問、慶州へ移動
28(木)	弥陽高等学校訪問、韓国文化体験（韓服試着・国楽体験ほか）	3(火)	慶州見学（石窟庵、仏国寺ほか）
29(金)	慶熙大学校訪問（日韓文化比較特別講義、韓国語授業受講）	4(水)	釜山へ移動、龍宮寺・海雲台見学
30(土)	臨津閣、都羅展望台、第三トンネル見学、ホームステイ対面式	5(木)	金海国際空港より帰国

日韓スポーツ交流とその展望

～二つのロンドン五輪の時空を超えて

スポーツライター 大島裕史

今年のロンドン五輪の男子サッカー・3位決定戦は、日韓対決になった。試合は2-0で韓国が勝ち、五輪のサッカーで、初めてメダルを獲得した。試合後、物議を醸す問題が生じたものの、サッカーの母国・イギリスで開催された五輪で、隣国のライバルである日本と韓国が、メダルをかけて試合をしたことは、アジアのサッカーの発展を示す、意義のある快挙だった。こうした戦いを、64年前、誰が予想しただろうか。

追憶の1948年ロンドン五輪

1948年のロンドン五輪に、敗戦国である日本は出場することができなかった。一方韓国は、政府樹立前であったが、太極旗を先頭に入場し、夏季五輪初出場を果たした。

当時は韓国からロンドンへの直行便はなく、選手団は、まず釜山から船で博多に行き、鉄道で陸路横浜に行き、そこから船で香港に行き、香港から空路ロンドンに向かった。

選手団の選手・役員には、マラソンの金メダリスト・孫基禎、銅メダリストの南昇龍ら日本代表としてベルリン五輪に出場した選手や、日本の大学に留学した人も多くおり、日本で旧友たちとの再会を喜んだ。



1948年ロンドン五輪に向け横浜港に集まった韓国選手団

植民地時代という苦難の時代にあっても、スポーツマン同士には、立場を超えた友情があった。ロンドンへの道は、戦後の日韓のスポーツ交流の第一歩でもあった。

1948年のロンドン五輪で注目のサッカーで韓国は初戦、64年後のロンドン五輪で優勝を果たすメキシコを破り、五輪での初勝利を挙げた。次はスウェーデンと対戦であった。

この試合、前半スウェーデンが4-0とリードした。ハーフタイムの時、コーチ兼選手であった金容植は、「日本がスウェーデンに勝った時も、前半2点をリードされた。いいか、攻めて行くぞ」と、檄を飛ばした。1936年のベルリン五輪で日本のサッカーは、3-2でスウェーデンを破る、いわゆる「ベルリンの奇跡」を起こした。金はこの試合に、日本代表として出場し、勝利に貢献した。

1948年のロンドン五輪の韓国・スウェーデン戦であるが、スウェーデンの猛攻は後半も続き、韓国は0-12と大敗した。スウェーデンは、ベルリンでの屈辱があるだけに、同じアジア

の韓国に対しても、本気で臨んだ。この大敗は、韓国のみならず、アジアと欧州との差を示すものでもあった。

1948年のロンドン五輪で韓国は、重量挙げとボクシングの銅メダル2個に終わった。

日韓のスポーツ躍進

その後、日本は1964年の東京五輪を契機に、スポーツ強国へと躍進した。韓国は、日本の女子バレーボールチーム、いわゆる「東洋の魔女」を率い、金メダルを獲得した大松博文ら、日本の指導者の教えや、在日韓国人らの支援を受け、力をつけた。そして、1988年のソウル五輪開催をきっかけに、日韓両国の立場は逆転する。

韓国が夏季五輪に初めて参加してから64年。サッカーをはじめとして、多くの近代スポーツの発祥の地であるイギリスで、韓国も日本も、十分に存在を示した。

日本と銅メダルをかけて戦った、韓国男子サッカーのフィジカルコーチは、日本人の池田誠剛であった。監督の洪明甫をはじめ、韓国チームには、Jリーグ経験者も多い。

日本バドミントン、悲願のメダルを獲得した藤井瑞希、垣谷令佳組を指導した日本代表監督は、韓国バドミントン界の英雄・朴柱奉であり、日本アーチェリーに、団体初のメダルをもたらした女子チームのリーダー的存在は、韓国で生まれ、育った早川漣であった。

五輪本大会出場は逃したものの、間違いなくチーム力を引き上げた、日本の女子ハンドボールの監督および、女子バスケットボールのコーチは、韓国人であった。

五輪などの国際大会では、どうしてもナショナリズムが高まる。特に隣国のライバルである日本と韓国には、その傾向が強い。しかし現場では、両者の壁は低く、交流も盛んである。ただ、身近な間柄であるだけに、なおのこと互いに負けない関係でもある。

とはいえ、日韓間の勝敗のみにこだわる、偏狭なナショナリズムは、全く意味がない。大事なことは、ライバルとして互いに高め合い、世界の舞台に飛躍していくことである。今回のロンドン五輪では、その一端を示すことができたのではないかな。

もっとも、高めていくのは、スポーツの実力だけではない。スポーツを取り巻く、文化や精神の成熟も含めてのことである。



おおしま ひろし
大島裕史

PROFILE

1961年、東京都生まれ。出版社勤務の後、1993年に延世大学校韓国語学堂に留学。帰国後は、スポーツを中心に、韓国社会について取材、執筆。『日韓キックオフ伝説』で、1996年度、ミズノスポーツライター賞受賞。近著『魂の相克』ほか、多数の著書がある。

日韓伝統文化総合紹介交流イベント in 釜山

一般社団法人文化遺産調査研究保存継承機構ゆらび 事務局長 横尾 靖

日本伝統文化を紹介するまで

2010年、日本は平城遷都1300年祭を迎え、奈良では各種イベントも開催された。今から1300年前大陸から様々な文化が日本に入り、また遣唐使を派遣したりして大陸の文化を学ぶための交流が盛んに行われた。文化の交流というよりは、日本は大陸の文化をスポンジのように吸収するべく学び自国の文化の形成に役立て、そして今日まで継承、発展させてきた。仏教の教えはもとより建築から仏像、絵画、音楽、楽器など大陸の憧れの文化はいろいろな形で日本に多大なる影響を与えてきている。今日ではあたかも日本文化は我々が自ら生み出したように思われがちだが、その大半は輸入した文化がベースになっていることを私自身、再認識させられ何とかその恩恵に対しての感謝の気持ちと御礼をこめて、文化を伝えてくれた国々で日本の伝統文化を紹介させていただきたいと考えていた。

韓国釜山で交流イベント開催

そんな折、韓国の要人から日本は芸術、音楽、舞踊など様々な分野で伝統文化を現代まで守り伝えてきており、それは素晴らしいことで尊敬に値する、是非一度韓国で日本の伝統文化を総合的に紹介して欲しいとの要請をうけた。その要人は釜山慶星大学の元学長で井戸茶碗研究の第一人者であり、2009年に日本に来られた際、我々も陶芸の指導をしていたが、その後も日韓の陶芸家が日本で展覧会やワークショップを通して交流させていただいている。

今まで一般社団法人ゆらびは2002年7月「オランダの国際園芸博覧会フロリアード」、同年9月上海にて「日中国交正常化30周年記念事業」、2003年9月「サンクトペテルブルク建都300年祭～ロシアにおける日本年ジャパンフェスティバル」などに参加し文化交流をしてきているが、一番身近で関係深い韓国では実現していなかった。今回はじめて日本画、書、陶芸、生け花など芸術作品の展示や折畳み式茶室屏風を利用した茶道のお点前、生け花、香席のワークショップ、笛や民族楽器の演奏、創作歌舞伎舞踊、韓国伝統舞踊の公演など総合的な伝統文化の紹介と交流ができたことは誠に嬉しい限りである。



茶室屏風を見学する学生達

展示とワークショップには1日平均160名、舞台公演には約400名、合計で1200名以上の方が来場された。展示やワークショップの内容が多岐にわたり充実しているのととも1日では見きれないと何度も見に来られた方がいたり、地方の学校で日本語と日本文化を勉強している学生が2時間半もかけて来場されお茶と生け花のワークショップ、舞台公演に参加し韓国に居ながら日本文化に触れられて良かったな

ど喜びの声を聞いた。慶星大学校やBusan Dance Theater Shin、日韓文化交流基金、在釜山日本国総領事館の協力のお陰で盛大にまた深い部分での交流ができたのではないかなと思われる。

真の交流のために

一方、本イベントの準備を進めてきた担当者として、韓国は近くて遠い国であると実感したのも事実である。それは根本的に我々が韓国を理解していない、分かっていないことが原因であると思われる。お仕着せや通り一遍の伝統文化紹介ではなく相手の目線に合わせた文化交流が本当の意味でできたのか。日本の伝統芸術や舞踊、音楽の素晴らしさを単にひけらかしてしまったのではないかと、自己満足に終わってしまったのではないかと反省するところもある。準備段階ではこちらの企画内容がきちんと伝わっておらず、現地入りし打ち合わせをしてはじめて理解し合えていないことが分かったり、突然スケジュールが変更されたりしたが、このようなことは海外イベントではよくあることで限られた条件と状況の中で如何に対応するかが重要である。

今回のイベントは、韓国への理解を深める第一歩と考えている。このような交流を繰り返し、お互いを十分理解して初めて真の交流ができるのであろう。それにはじっくり時間をかけて継続的に進めていくことが大切である。香道のワークショップで香席「琴玉香」に参加した9歳の韓国の女の子がはじめての体験にもかかわらず、3時間もの間あきもせず真剣な眼差しでお香を味わい何かを感じ取った様子であった。その子が韓国主催のパーティーの席で一生懸命我々に食べ物を運んでくれたり、飲み物を勧めてくれた。何か少しでも交流の一助となれたのではないかと嬉しさが込み上げてきた。

これからも真の交流を実現するために日本と韓国両国で定期的にこのような文化イベントを開催し、相互理解をより一層深めて行きたいと思っている。



舞台公演カーテンコール



よこお やすし
横尾 靖

一般社団法人文化遺産調査研究保存継承機構
ゆらび 事務局長 株式会社マスマミ東京 代表取締役、
表装デザインプロデューサー

日本の伝統文化である表装文化を世間に広めるべく国内はもとよりイギリス、フランス、オランダ、ロシア、中国など広く海外で展覧会、公演、ワークショップを企画し文化交流に努めている。職人、芸術家、音楽家、舞踊家達の才能を一般に広める努力をしている。

PROFILE

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2012年度第1四半期（2012年4月1日から6月30日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪韓団

団体名	団長	計*	男	女	期間	主な訪問先
日本教員 (第1団)	引地 正 宮城県七ヶ浜町立七ヶ浜中学校教諭	15	9	6	6/26～7/5	三峰初等学校 冠陽中学校 弥陽高等学校

※引率含む人数

2 理事会及び定時評議員会のご報告

6月7日に第53回理事会、6月28日に平成24年度定時評議員会が開催され、平成23年度事業報告及び財務諸表等報告が承認されました。

3 第2期日韓新時代共同研究プロジェクト

6月29日～30日に東京で第3回目の会合を開催し、7つの研究テーマについて、外部専門家からヒアリングをして意見交換を行いました。

4 賛助会員

2012年4月1日～6月30日の期間に、特別会員1名、個人会員27名の方に賛助会員制度にご加入いただき、36万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます。（五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数）

特別

檜崎正博

個人

青野正明

秋月望

李炯喆

石丸重尚

林在圭

梅田博之

大竹洋子

木畑洋一

木村光一

黒柳慶子

鮫島章男(3)

徐正基

白川豊

須川英徳

芹川哲世(2)

中塚明

中野照男

中山めぐみ

波田野節子

浜之上幸

林和彦

林史樹

藤原祥二

堀泰三

前田二生

三ツ井崇

和田とも美(2)

第3期日韓文化交流会議メンバー

第3期日韓文化交流会議のメンバーは以下の通りです。第4回全体会議の様子はP1に掲載しています。

日本側メンバー（委員長以外は50音順、敬称略）

委員長	川口 清史	学校法人立命館総長・立命館大学長
	有川 節夫	九州大学総長
	市川 森一	作家、脚本家*
	小倉 紀蔵	京都大学教授
	川淵 三郎	日本サッカー協会名誉会長
	木村 典子	日韓舞台芸術コーディネーター
	倉本 裕基	作曲家、ピアニスト
	小針 進	静岡県立大学教授
	辻原 登	作家、東海大学教授
	寺脇 研	映画評論家、京都造形芸術大学教授
	山村 浩二	アニメーション作家、東京藝術大学教授
事務局長	内田 富夫	日韓文化交流基金理事長

韓国側メンバー（委員長以外は韓国語順、敬称略）

委員長	鄭求宗	東西大学校国際学部教授兼日本研究センター所長
	鞠守鎬	ディディ舞踏団長
	金亨駿	CJ E&M映画事業部門企画担当顧問
	南宮演	音楽家、Studio FAT代表
	朴晟源	韓国芸術総合学校美術院造形芸術科副教授
	朴銓烈	中央大学校日語日文学科教授
	孫正禹	韓国演劇演出家協会会長
	鄭起泳	NEOWIZ GAMES副社長
	鄭梨賢	小説家
	崔鍾日	韓国アニメーション制作者協会会長
	崔泰枝	国立パレエ団団長
事務局長	李康民	漢陽大学校教授

*市川委員は2011年12月10日に逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

公募プログラム フェローシップ・助成のご案内

フェローシップおよび人物交流助成の募集要項・申請書は当基金ウェブサイト
<http://www.jkcf.or.jp>からダウンロードできます。

2013年度 招聘・派遣フェローシップ

フェローシップは日韓両国の優れた研究者を招聘・派遣し、調査・研究などの活動を行う機会を提供するとともに、特に次代を担う中堅・若手世代の研究者の相手国における滞在研究を支援する制度です。

2013年度分の募集期間は2012年10月1日から10月31日までです(招聘は10月2日から10月31日まで)。

期 間	招聘フェローシップ(訪日)		派遣フェローシップ(訪韓)
	短期コース	長期コース	
年 齢 ^{*1}	1ヶ月～3ヶ月 満30歳以上	3ヶ月を超え11ヶ月 満30歳以上50歳以下	1ヶ月～11ヶ月 満30歳以上50歳以下
支給額 ^{*2}	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円
	研究費月額 120,000円	研究費月額 120,000円	研究費月額 70,000円
	渡航費 実費支給	渡航費 実費支給	渡航費 実費支給
		到着手当 65,000円 帰国手当 64,000円	
書類送付先	ソウル日本大使館公報文化院、釜山総領事館、済州総領事館		日韓文化交流基金

*1 2013年4月1日現在の年齢

*2 滞在費月額は基金の基準により、申請者の研究歴などに応じて決定します。滞在費の支給額は当該月の相手国での滞在日数により増減します。

2013年度 人物交流助成

人物交流助成は日韓が共同で開催する青少年・草の根交流、シンポジウム・国際会議、芸術交流の各種事業を支援し、日韓の交流をより活性化・多様化させ、両国の友好・交流関係を深めることを目的としています。

2013年度(2013年4月～2014年3月)実施事業に対する人物交流助成の申請を、2013年1月4日から1月25日まで受け付けます(年1回のみ募集となりますのでご注意ください)。

青少年・草の根交流

青少年や大学生による日韓相互理解のためのプログラム、民間交流を目的とする事業

シンポジウム・国際会議

日韓両国の文化や日韓関係など、両国に関わる人文社会科学分野のテーマを扱うシンポジウム・国際会議

芸術交流

専門家による公演・展示・共同制作など、芸術分野における本格的な交流を目的とする各種の文化事業